恋愛小景

情交　　「涙」

さつき

序

　女は煙草に火を点けた。
　暗い車内で、ライターの周辺だけが明るくなる。窓に反射して映る
姿を見て、彼女は思わず苦笑いをした。疲れ切った表情で煙草に
火を点けている彼女自身に気が付いたからだ。煙草を深く吸い込み、
紫煙を吐く。これで何本目の煙草になるんだろう、思わずそう呟いていた。
　スポーツワゴンの車内。彼女はもう１時間近く友人を待っていた。
人気のない駐車場。彼女の車だけがぽつんと停まっている。友人が
指定してきた待ち合わせ場所は、間違いなくここだった。指定の時間は
２２時。いつもの待ち合わせの時間より３時間程遅い。それから１時間、
彼女は車内で待ち続けた。その間、連絡は全くない。
　煙草の灰を灰皿に落とすと、彼女は外に出てみた。狭い車内で待って
いた所為で腰が痛くなりそうなのを回避するという目的もあるが、気分を
変えるためでもあった。ドアを開けた瞬間、冷たい夜気が車内に侵入
する。１０月後半の北海道の夜気は流石に冷たい。助手席に置いてあった
フリースのパーカーを羽織ると、彼女は外へ出た。
　夜気に触れ、ひんやりと冷たくなった車体に女は寄りかかった。そして
何気なく空を見上げる。雲ひとつない空。綺麗な星空が頭上にあった。
「星が綺麗。もう冬になるんだな……」
外の寒さに手をすりあわせながら、彼女はそんな事を呟いていた。
　星空を見詰めていると、ポケットから聞き慣れた音が響く。待っていた
友人から電話が来たようだった。慌てて彼女は携帯電話を取り出し、話し
始める。
「もしもし……ああ…うん…。とりあえず１時間近く待ってるんだけど…。
え…？…ああ、そこからならすぐね…。了解…待ってます」
電話を切ると、ドアを開けて車内に滑り込む。ルームミラーを少し下げて、
彼女は自分の顔を見た。そして眼鏡を外し手早くメイクを直す。念入りに
確認したあと、眼鏡をかけてルームミラーを元に戻した。
「これでよし…と」

　しばらくすると、車のエンジン音が近付いてきた。彼女が後ろを振り
返ると、白のセダンタイプの車が近付いてきた。彼女は車を降りた。
どうやら、友人の車であるらしい。車はゆっくりと彼女の車の横に
停まった。運転席側の窓がゆっくりと開く。乗っていた男性が顔を
外に出した。年の頃は３０代の頭…といったところか。
「悪いね。少し遅れたよ」
ずり下がった眼鏡を手で押し上げながら、男はそう言った。
「貴方の少しは１時間なわけね。まぁ、別にいいんですけど。アタシの
車で話すんでしょ？」
彼女は悪戯っぽい笑顔を顔に留めると、自分の車を目で差した。男は、
着ていたスーツの上を脱いで車を降りた。
「ああ、君の車の方が広いからね。俺の車は色々乗ってるし」
男の車の後部座席には、様々なものが乗っていた。どうやら仕事で使う
ものらしい。
　「本当に色々乗ってるもんね。じゃあ、どうぞ」
女は自分の車の後部座席のドアを開けた。男が乗り込むのに続いて
彼女も乗り込んだ。
「久し振り。元気だった？」
女がフリースのパーカーを脱ぐのを待って、男はこう切り出した。
「ええ、一応ね。仕事は忙しいけれど」
女はパーカーを助手席に放り込むと、男に向き合って言う。
「俺も忙しいね。しばらく連絡取れなくて済まなかった」
シートにもたれ掛かりながら、男は苦笑した。気にしないでと、
小さく呟いて女はウインクしてみせる。
「アタシは待ってるの得意だから。たとえ１時間連絡なしで待たされようと
もね」
先ほどまで女の顔に張り付いていた悪戯っぽい笑みが、その言葉で
さらに強調される。男は肩をすくめてみせた。
「悪かったよ…。仕事で少し忙しかったんだ」
女は同じように肩をすくめてみせながら、ジーンズのポケットから煙草を
取り出して、火を点けた。
「アタシだってそれくらいわかってるよ。貴方が忙しいのくらい」
同じように男もワイシャツのポケットから煙草を取り出して火を点ける。
少しの沈黙。二人の口から吐き出される紫煙が車内を白く曇らせていった。
　ところで、と女が沈黙を破った。

「何でまた今日はこんなところへ呼び出したわけ？」
不意の質問に男は驚いたようだったが、灰皿に灰を落とすとにっこりと女に
微笑みかける。
「いつもは飯食ったり酒飲んだりしてるのに、今日はなんで車なのかってこと？」
「そういうこと。普段は街の居酒屋とかで待ち合わせじゃない？なんで今日は
ここなの？なんか別の用事？」
男は黙って首を横に振った。まぁいいけど、そう言って彼女は煙草の火を消した。
「たまにはこういうのもいいかもね。アタシも金ないし」
女はシートに身体をもたせ掛けた。
　「君は他の若い子と違って、余りしつこく理由を聞かないんだね」
女が視線だけを男に向ける。その視線を絡め取るように、男は顔だけを動かし
て彼女を見詰めた。
「若い子って……アタシ大して若くないわよ」
男はシートから上体を起こし、再度肩をすくめてみせる。
「２４の君が若くないなら、３５の俺は一体何なんだい？おじいちゃんか？」
女は視線を車外に移す。見詰められる事に耐えられなくなったようだった。
「口癖なのよ…。ごめんなさい。それに、『精神的にはもっといってる気がする』、
そうやって色んな人から言われるし」
　男は女の顔に両手を添えて、自分の方を向かせた。そしてじっと見詰める。
「多分、この口が悪いんだろうな。こんな可愛い顔をして、ぐさりと胸に突き刺さ
る一言を言う」
顔に添えた片手を唇に移し、そのまま唇の形に添って撫でていく。女はその
手を自分の手で制した。
「やめて」
その制止をものともせずに、男は指で唇を一周した。
「どうして駄目なのさ」
女は何も言わずにただ下を俯く。次に繋ぐ言葉を探しているようだ。男はその
顔をもう一度自分の方へ向かせると、唇を重ねる。突然のことに驚き、彼女は
力任せに身体を離した。
「何すんのよ！」
「駄目なの？」
　まるで雨に濡れた仔犬のような、切なげに「何か」をねだる目で男は女を見た。
その目に彼女は弱い。その「何か」が何を指すのか彼女もわかっているが勝て
ない。確実に、彼は彼女の身体を欲している。彼女はそれが痛いほどわかった。
最初からわかっていたはずだった。いつもと違う待ち合わせ場所。いつもより
遅い時間。待っている１時間、彼女はそればかりを考えていた。理由は程なく
見つかった。しかし、彼女はそれを認めたくなかった。だから、唇を撫でられた

ときに、自分の手で制止した。こうなるのを恐れたためだった。
「駄目なの？」
再度男は聞いてくる。女は首を横に振れなかった。
「じゃあ、いいんだね？」
後部座席のシートを女は強く掴んだ。でも、首は横に振る事が出来ない。
「いいんだね？」
答えを言わない女に、男はしつこく聞いてくる。彼女はようやっと、蚊の鳴くような声を搾り出した。
「奥さんいるじゃない…。駄目だよ」
男は女の肩を両手で掴み、ゆっくりとその身体をシートに押し倒した。
「そのことは…これから少しの間だけ忘れてくれ。俺という男のことだけ見てくれないか？」
女は何も言わなかった。再度唇は重ねられ、それから二人が一つになるのに、さほど時間は要しなかった。

　１時間の後、女は男に脱がされた服をかき集めて身に纏い始めた。
彼がそれを腕で制する。
「まだ着なくてもいいだろ」
その腕を振り切って、その動作を続ける。
「だって…誰が来るわからないし…」
男は裸のまま煙草に火をつけた。
「こんな夜中だよ。誰も来ないだろう」
「見られてからじゃ困るのよ」
「今の今までやってたのに？」
　やれやれ、と言いながら、男は脱いだ服から財布を取り出して一万円を
女に手渡した。彼女の顔色が見る間に青ざめていく。
「……どういうこと？」
男は下着を身につけ始めた。
「どういうことも何も、そういうことさ」
女の顔色が、青から赤へと変わっていく。
「…まさか…これ…」
手早く服を身に纏い、ネクタイを締めていた男は事も無げに言い放った。
「そういうことさ」
靴を履くと、男は小さく女にキスをした。
「君の体、なかなか良かったよ。また、頼むわ」
　車を降りると、何事もなかったかのように自分の車に乗り込んで、男は
去った。女は、自分の車の中からただ呆然とそれを見送るしかなかった。
一万円を握り締めたまま、運転席に移る。彼女が呆けたように一万円札を
見詰めていると、助手席から携帯電話の着信音が鳴り響いた。慌てて電
話に出る。
「もしもし…」
「あ、俺だけど。また来週いいかな？」
　女は何も言わずに電話を切った。携帯電話の液晶画面に、ぽたり、と何
かの滴が落ちた。ぽたり、ぽたり、その滴は少しずつ数を増やしている。彼
女は携帯電話を閉じた。そしてルームミラーを動かして自分の口元を見た。
口紅はさっきの口づけでずれている。
「酷い顔…」
頬を温かいものが伝った。女にはそれが何かわからなかった。ルームミラーを
動かして自分の目元を確認する。涙だった。マスカラが剥げ落ちている。
「あはは…酷い顔…。アタシったら…なんて顔してるんだろ…。あはははは…」

胸に何か熱いものがこみ上げてくる。目頭がさらに熱くなり、堪えきれなくなる。女はハンドルに突っ伏して泣いた。思い切り泣いた。クラクションが鳴っているのにも気付かずに。

　しばらく泣いた後、女は顔を上げた。ルームミラーを下げ、とりあえずメイクを直す。ルームミラーを戻し、ライトを点灯させ、シートベルトを締め、車を動かし始めた。手に持っていた一万円札は、握りつぶされパーカのポケットへ突っ込まれ、それ以来思い出されることはなかった。